

2014年東北応援ツアー レポート

「現地を訪問して想うこと」

ツアー参加者氏名 大島 明

卒業年 1972年 卒業学部 文学部

参加コース C 福島県コース

はじめに

出発時の挨拶の中で校友会福島支部馬場幹事長が仰った「見えないものを見て、感じて帰ってほしい」旨のお話が、行程中ずっと耳に残っていました。川内村での遠藤雄幸村長と磐梯熱海の宿舎で聞いた飯塚俊二県企業局長（校友）の講話には「見えないもの」との苦闘が語られ、直接の当事者から聞く迫真力のこもったお話には、認識を新たにしたいと思いました。

1. 「見えないもの」その1 放射線対策

「線量計」を見るのは初めてでした。川内村でこの装置を見た時「現地」に来たということ、あらためて印象づけられました。

確かに線量は基準値以下ではありましたが、若年層の帰村が大きな課題だという遠藤村長のお話に復興の厳しさを感じましたが、その迫力には敬意を抱きました。村内で時折姿を見せる除染土の仮置き場にハッとしながら、「現地」を感じました。

村内の幹線道路の朝は、常磐線沿線へ除染に向かうクルマで渋滞になるそうで、村内にあるプレハブのビジネスホテルが除染関係で盛況と言う話、巨大ゼネコンの事務所が設置されていることなど、徐々に「見えないもの」も姿を現して来ました。

2. 「見えないもの」その2 村を出た人と村でがんばる人

富岡町からの避難者を受け入れていた川内村が全村避難を余儀なくさせられたと言うことは、ニュースで知ってはいましたが、改めて「現地」で聞くと深刻さが違います。

9月に解除されても人はすべて戻ってくる訳でなく、戻る人と戻らない人の分断が始まろうとしていると言うことでした。「戻るオペレーション」の難しさ、「選択・判断・自立」をキーワードに取組んでいる村と村の人々の努力の一端には気付けたかも知れません。

また、この3つのキーワードは、今各地で一目盛んな「まちづくり」に

も大変示唆に富むもののように思えました。こうした中で形成されるコミュニティは新たな時代のモデルになるかも知れない、と期待するのは軽薄な感覚ですが、「戻るオペレーション」のお話は印象に残る土産になりました。

3. 「見えないもの」その3 風評被害

人が戻らないことのほか、農産物が売れないことへの取組みの困難さは、県の飯塚局長も説明されました。安全を強調するだけでは人に信じてもらえないことから、情報はすべて示すことを基本としているということでした。これは、今の社会でやはり重要なことで、不安材料を隠すと帰って不安を増幅することになることを思い起こしました。息の長い道のりだと仰ったことが耳に残っています。我々には、「離れていても、知る努力を忘れない」ことが復興支援になると強調されました。

厳しい環境の中、奮闘を続ける校友、飯塚局長のご健勝を祈念します。

4. 「見えるもの」の素晴らしさ

磐梯熱海の湯、軟らかで緑の谷あい、ゆったりとできました。福島は温泉が多く、それらが震災時は避難所として機能したという飯塚局長のお話をきいて、いっそう暖まったように思いました。

五色沼にも行きました。ちょうど紅葉の始まりで、緑青色の湖面と鮮やかな赤と黄のコントラストが、好天に恵まれ見事でした。3キロ余の散策路は小さな流れもあり、大きな火山岩もあり飽きることはありませんでした。東北の秋は穏やかに立命館の校友を迎えてくれました。

おわりに

校友会が用意して下さったお土産の数々、大変おいしく頂きました。お土産を通じても、それを作ってがんばっている校友の姿を知り、私自身が勇気づけられました。

解散後郡山駅で、県立高校の英語科教員として活躍中の若い校友 W 君と久しぶりに会って、お茶のひと時を楽しみました。これもいい福島土産になりました。